IS～インフィニットストラトス～一撃必中

一撃必中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ～インフィニットストラトス～一撃必中

【Ｎコード】

Ｎ６３５０Ｑ

【作者名】

一撃必中

【あらすじ】

ＩＳ～インフィニットストラトス～の登場によって男尊女卑の社会から女尊男卑の世界えと変わってしまった世界。これはそんな世界で紡がれる織斑一夏と東雲拓也のＩｆの物語。

初めて書いたので良かったら感想お聞かせください。

プロローグ（前書き）

初投稿です！

プロローグ

～欧州のとある研究所～
「な、何だよあれは！！」
「知らないわよ、そんな事！大体あれはＩＳなの！？」
２人の女性は困惑していた、今自分たちが何と戦っているのかその事に…
　女性達が身に着けている物……ＩＳとは似ても似つかないのだ。
～？？？～
「ハァ…すぐにここ破壊して逃げるつもりだったんだけどな…」
１人の少年が目の前の状況を見て１人溜め息をついた
「…目の前の２機につげる、亡国機業（ファントム・タスク）について知っていることは？」
～女性達サイド～
「な！？」
女性はそれ以上言葉がでなかった。言っている内容にではない……
…相手が『男』だったからだ…
「何故男がＩＳを使える！？大体それはＩＳなのか！？」
～？？？～
「質問しているのはこちらなのだがな…」
「…もう時間もないサヨナラだ」
～女性達サイド～
敵が言葉を発したあと急に敵の動きが変わった。
　彼女達が最後に見たのは背中から緑色の粒子を出している『何か』だった。
～？？？～
「……終わったか」目の前の研究所の残骸を見ながら少年が呟いた。
「また、収穫はなしか……うん通信？」
「やっほ～！！た～くん！！」
「た～くん止めましょうよ束さん…」

「も～昔みたく束姉～って呼んでよ～！！」
「…昔の事です。それで、どうしたのですか？何か急用でも？」
「あのね、お誕生日おめでと～って言おうと思ったんだよ」
「誕生日？ってああ今日で俺１５歳か」
「やっぱり忘れてたんだね…」
「いや、最近忙しくて…で、それだけではないのでしょ」
「お～鋭いねさっすがた～くん！！ち～ちゃんお届け物してほしいんだ♪」
「千冬さんにってことは、あれですか？」
「そだよ～じゃあ待ってるから取りに来てね～バイバーイ」
「相変わらずだな束姉は…んじゃ行きますか」
　緑色の粒子の尾を引きながらそれは飛び立って行った。『ハァ…やっとついたか何時も場所が変わってるから見つけるに苦労するんだよな』
拓也はそう呟きながら部屋の中に入って行った。部屋の中にはパソコンに向かっているうさミミのようなカチューシャを付けた1人の女性がいた。何を隠そうこの女性こそがＩＳを生み出した天才科学者篠の之束その人である。
「あ、た～くん！！遅かったから心配したよ～。」
『何時も何時も場所が変わってるから見つけるの大変なんだよ…』
そう、この人今世界中から絶賛指名手配中である。
「そう言えば、メサイヤの調子は大丈夫？」
『（華麗にスルーしたなおい…）まあまあって感じかな。頼んでおいたもの出来てる？』
「私を誰だと思ってるのかな？天才美少女束さんにかかればあれぐらいちょちょいのちょいさ～！！」
そう言ってやたらと自己主張している胸を張ってみせている。もう美少女という年じゃ無いだろうというツッコミは無しだもう人生を終了したいと言うのなら止めないけどね…
「メサイヤの追加武装のアーマードとトルネードならもう最終調整

終わってるから、後はインストールするだけだね。」
『流石は束さんですね。まだ頼んでから1ヶ月たってないのに』
そう言って俺は手首につけている光沢のある黒いブレスレット待機状態のメサイヤを束さんに渡した。
「それが束さんクオリティーさ！！一時間もあればインストールは終わると思うよ。後さ、GNドライブの解析進んでる？」
『いや、全然進展ありませんね…束さんの方はどうですか？』
「私の方もこれと言った進展は無しかな～…ある程度までは解析出来たけどそれからは完全にブラックボックスのままなんだよね…」
『ハァ…父さんと母さんはいったいどうやって完成させたのやら…』
「ハァ…これじゃGNドライブの量産化どころかツインドライブシステムも夢のまた夢だよ～…」
束さんが溜め息をつくのもしょうがない。両親が亡くなってからかれこれ6年間研究を続けているが殆ど解析が進んでいないのだから。
補足説明しておくと、GNドライブとは俺の両親が開発した半永久機関の事である。両親はこれを2つ開発していてそのうちの1つは俺の愛機であるメサイヤの動力源として使用している。もう1つの方は研究解析のため束さんに預かってもらっている。通常ISはコアを中心として成り立っており、動力源ももちろんコアである。しかし俺のメサイヤはその動力源にGNドライブを使っているため厳密に言うとISではない。
「まあ、しょうがないですよ。気長にいきましょう？」
『そうだね～今すぐ必要って訳でもないしね～。…うん？あ！？ち～ちゃんからだ♪』
千冬さんから連絡かな？そうだね最近話してないな。
「た～くん！！ち～ちゃんが変わってって！！」
ニコニコしながら通信機を渡してきた束さん。相変わらず千冬さんにべったりだな～。
『はい、拓也です。』
「ああ拓也か。今回はわざわざすまないな…」

『気にしないで下さい千冬さんには色々とお世話になってますし、一夏の為でもありますから。』
「そう言って貰えると助かるよ。それでだな、お前に1つ依頼があるんだが」
『依頼ですか？白式以外の件で？』
「ああ。お前には来週からうちの学園ＩＳ学園に入学して貰いたい。」
『……はい？』
つい間抜けな声が出てきてしまったがしょうがないと思う。
「聞こえなかったか？お前にはうちの生徒になってもらうと言ったんだ。」
『え！？いや！？何で？』
『ハァ…まあ落ち着け拓也理由としては、一夏の護衛をしてほしいんだがもう一つ厄介な事になってな…』
『一夏の護衛は理解できますけど、…厄介な事って言うのは？』
何故だろう、嫌な予感しかしないのは…
「ハァ…あのバカ（束さん）が世界中にＩＳを動かせる2人めの男が現れたと発表下のだ。明日にはニュースになっているだろうよ。おかげでＩＳ委員会は大慌てになってな、なんせいきなりＩＳを動かせる男が2人もあらわれたんだからな…そう言うわけでお前には保護という名目でうちに入学してもらう事になったのだ…」
『……束姉ー！？何してくれてんの！？』
「てへ♪」
『てへ♪じゃねー！？』
「まあまあた～くんいっちゃんの近くにいれば亡国機業の情報集めやすくなると思うよ～？」
「まあ、今までよりはマシになるんじゃないか。最近手詰まりだっ

たんだろ？」
『ハァ…それを言われたら何も言えないじゃないですか…わかりました来週からお世話になります千冬さん。』
「ああわかった。資料は後で送るからしっかり目を通しておけよ？」
『了解です。あっでも大丈夫何ですかね俺のメサイヤって厳密に言うとＩＳじゃ無いんですけど…』
「ああその事なら心配するなメサイヤは特殊な次世代型ＩＳということにしてあるからまず心配無いだろう。それにお前には技術スタッフとしても来てもらうつもりだしな。」
『結構ムリがあるきもするんだけどな…てか技術スタッフって…』
「ッフ…お前なら余裕だろ『ＳＭＳ』の社長どの？」
『ハァ…解りましたよ。でもＳＭＳに関しては他言無用でお願いしますよ？』
「わかっているそれでは学園出会おう。」
『はい』
「た～くん！！いっちゃんと箒ちゃんに宜しくねってどうしたの？」
『何でもないですよ束さんちょっとＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＩしようか』
「ヒィ！？た～くん！？止めて！？ゴメンナサイってい、いやーーー…」
『まったくあの人は…でも日本かかれこれ６年ぶりだな…一夏と箒元気にしてるかな…』
さてと色々と準備しましょうかね。
とりあえず部屋の隅に転がっているうさミミは無視しておこう。

プロローグ（後書き）

やっと書けました。今までは読む側だったので書くのがこんなに難しいとは…

感想まってます！！

第1話（前書き）

全然話が進まなかった…

第1話

やっとついたな～ＩＳ学園今俺こと東雲拓也は学校というのにはあまりにも広すぎるだろオイっとツッコミをいれたくなるような学園の正門の前にいる。あの通信の後２時間もしないうちにＩＳ学園の制服とあなたの町の電話帳？というぐらい分厚い説明書や何やらが届いた。いったいどうやって届けたのやら…

『さてと千冬さんが出迎えてくれると言っていたけどまだかな～？』

うん？噂をすればなんとやらだ

「拓也スマン遅くなった」『いえ、今来たところですから。で早速ですがお届け物は何処に運べば？』

「ああ向こうのハンガーに運んで貰えるか」

『了解です』

さてあれから白式をハンガーに入れ、今は１年１組と書かれた教室の前に千冬さんと並んで立っている。

「それでは、名前を呼ばれたら入ってきてくれ」

『り、了解で、ですよ…』

「ハァ…何を緊張している？」

『千冬さんは俺がこういうの苦手だって知ってるじゃないですか～…』

「ッフフ…そこらへんは変わらんのだな」

うぅ…何も笑わなくてもいいじゃないかな？

「まあ何事も経験だがんばれ」

そう言って千冬さんはクラスにはいっていった。

～一夏サイド～

時間は少し戻る

「全員揃ってますね～。それじゃあＳＨＲはじめますよ～」

そう微笑みながら言うのはクラスの副担任山田真耶先生その人であ

る。服のサイズが合っていないのかだぼっとしていて、なんというか子供が無理して大人の服を着ましたてきな不自然さがある。
「それでは皆さん、一年間よろしくおねがいしましね」
「……」
けれど誰からの反応がない。
俺ぐらいは反応しておこうと思うが如何せん余裕がない。なぜか。簡単だ。俺以外が全員女子だからだ。
「じゃ、じゃあ自己紹介お願いします。えっと、出席番号順で」
ちょっとうろたえている担任があわいそうである。
「（これは…予想以上にキツい…てか俺の隣空いてるけど遅刻か？）」
「…くん。織斑一夏くんっ。」
「は、はい！？」
いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏がえってしまった。周りからクスクスと笑い声が聞こえてきてますます落ち着かなくなる。
「あ、あの、大声だしてゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」
気がつくと山田先生が頭をペコペコ下げていた。
「いや、あの、そんなに謝らなくても…自己紹介しますから先生落ち着いてください」
しっかりと立って後ろを振り向く。
「（うっ…）」
今まで感じていた視線がさらに強くなった気がする…
「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」
やりきった！！そう思って下げていた頭をあげると…あれ何だか「もっと色々喋ってよ」てきな視線と「これで終わりじゃないよね？」的な空気を感じるよ？
「……」
嫌な汗が背中を流れる。どうしたらいい、何を言えばいいんだ。
おい、箒、幼なじみのよしみで助けてくれまいか。…なぜに目を

おそらしなさるのかな～…
「（いかん、マズイ。ここで黙ったままだと暗いやつのレッテルを貼られてしまう）」
俺は思い切って口にした。
「以上です」
がたたっ。思わずずっこける女子が数名いた。どんだけ期待していたんだ？
パァンッ！！いきなり頭を叩かれた。
「いっーー！？」
この叩き方、威力、とある人物ーーよく知っているとある人物を思い出すのですが……
「……」
恐る恐るふりかえるとそこには…
「げえっ、関羽！？」
パァン！！また叩かれた。
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。でお前は挨拶もまともにできんのか？」
「いや、千冬姉、俺はーー」
パァン！！本日三度目である…
「織斑先生と呼べ」
「…はい、織斑先生」
「あ、あの～」
涙成分がに割増しの副担任山田先生の声が聞こえてきた。
「織斑先生。もう会議終わられたんですか？」
「ああ、山田君。クラスえの挨拶押し付けてすまなかったな。会議が終わった後に1人生徒を拾ってきたものでね」
うん？生徒を拾ってきた？俺の隣りの席の子かな？
「東雲入って来てくれ」
え？東雲ってまさかーー
～拓也サイド～

「東雲入って来てくれ」
ふう、やっと呼んでもらえた…千冬さんが入っていってから三度ほどスゴい音がしたのだが何だったんだろう？さて、行きましょうか…
『失礼します』
よし、声も裏がえなかったし最初の感じは大丈夫だなってあれ？何かやたらと静かなような……
「ねえねえ、あの子って…男の子なの？」
うん？
「でもどう見ても女の子だよね…」
「でも、織斑君と同じ制服だよね？」
な、なんなんだろうクラス中から妙な会話と視線をかんじるのだが…
「ハァ…諸君、諸君らが疑問に思っていることはだいたいわかる…この東雲はれっきとした『男』だ。東雲自己紹介をしろ」
…？千冬さんは何を当たり前な事を言っているんだろうか？まあ自己紹介をしてしまおう何だか視線が恐い……
『えっと…東雲拓也です。先日発行されたＩＳを動かせる男子の２人目です。えっと…しゅ、趣味はお菓子作りです…以上です。』
ど、どうだ一部噛んだけど俺にしては上出来だと思うんだけど…
「……」
だ、ダメだった！？ど、どうしたらいい！？
「キ」
『キ？』
「キャーーーー！？」
『！？！？』
な、何語ですか！？
「嘘、あのニュースで言ってた二人目がうちのクラスに！！」
「男の子に見えないよ～綺麗系の女の子って感じだよ～！？」
一気にクラス中から悲鳴にもにた歓声があがった。今一瞬おかしな事を言っていた子がいた気がするのだが……
「ハァ…まったくいい加減静かにしろ！！」

おお～千冬さんの一言で見事に静まったよ、流石は千冬さん。
「まったく、東雲は早く席につけ席は織斑の隣だ」
『了解です。千冬さ…』
パァン！！
「織斑先生だ」
『うぅ…はい、織斑先生』
さっきの音の正体はこれだったのか…何で出席簿であんな音がだせるんだろうか？それよりも今はーー
『久しぶり一夏６年ぶりかな？元気にしてた？』
さっきから驚いた顔でこっちを見ている親友に挨拶をしようかなーー～一夏サイド～
今俺はきっと間抜けな顔をしてるだろう。それほどに今目の前にいる男の顔に俺は驚いているのだら…６年ぶりに会うその大人びたその顔に…
『久しぶり一夏６年ぶりかな？元気にしてた？』
そう言われて俺はやっと話す事ができた。
「た、拓也だよな？」
我ながら何を聞いているのかと思う…
『他に誰に見えるのさ？うーんあんまり昔と変わってないと思うんだけどな…』
そう言って、拓也は胸のあたりまで伸びている髪をいじりはじめた。
「いや、変わってだろ最後に会ったのが６年前なんだから…でも、驚いたよ俺以外に男でＩＳを動かせるのが拓也だったとあな。顔どころか名前も発表されなかったからなぁ」
束さんが裏で手でもまわしたのかな？
『それは、こっちの台詞だよ。ニュースで一夏のこと見たときにどれほど驚いたことか。』
パンパン！！
「話に夢中になるのもいいが、後は休み時間にでもしろ」
千冬さんが手を叩きながらそう言った。

『り、了解です』
「わ、わかりました織斑先生」
何でそんなにどもっているのかって？
……千冬さんの後ろに一瞬阿修羅がみえた気がしたからだよ…
　それから、千冬さんの担任のしての挨拶でクラス中の女子が歓声をあげたり、一夏が千冬さんの弟であることがバレタりなど色々とあってなんとかＳＨＲが終了した。ＳＨＲの間何度か箒と目があったそのたびにそらされた…なんでさ？

第2話（前書き）

やっと書けました！

第2話

「……ダメださっぱりわからない」
1時間目の授業が終わった後一夏が机にうなだれながら力無く呟いている。
『どうしたんだよ一夏？』
「どうもこうもさっきの授業専門用語みたいなのばっかりでさっぱりわからないんだよ…」
『…なあ一夏参考書は読んだよね？』
「ああ、電話帳と間違えて捨てた」
ガタッと思わず椅子から落ちかけてしまった。
『一夏捨てたって必読って書いてあったじゃない…』
ハァ…と思わず溜め息がでてしまった。
『千冬さんに言って再発行してもらいなよ』
「それしかないか…でも怒られそうだなぁ…」
『一夏』
「何だよ？」『怒られそうだなぁじゃなくて、確実に怒られるんだよ』
隣りで一夏が何かぶつぶつ言いながらうなだれているけど自業自得だからまあしょうがないよね～♪
　それよりも、問題なのが
『この周りの状況だよな…』
簡単に今の周りの状況を説明すると、休み時間という事もありクラスの女子だけでなく他のクラスの女子、はたまた学年の違う女子までもが集まって俺と一夏の様子をうかがっている状態である。入学するからにはと、覚悟を決めてきたつもりだったがコレは予想以上にキツい…
　誰か話しかけてくれればいくらか楽になりそうだが、如何せんこのＩＳ学年が女子校のようなものなので男子に対する免疫がないら

しい…
「あなた話しかけなさいよ」的な空気と「あなたまさか抜け駆けしないわよね」的な緊張感に満ちている。
「なあ、拓也この状況何とかならないのか？」
おや？一夏がいつの間にか復活したらしい。
『何とかって言ってもね～…』
「…ちょっといいか」
『「え？」』
突然話しかけられて思わず声が漏れてしまった。てか、見事にハモったな一夏よ？
誰かが女子の牽制を競り勝ったのかな？っと思ったが周りの女子の反応をみるとどうも違うらしい。
『「……箒？」』
そこにいたのは、一夏と同じく6年ぶりに会う幼なじみの姿だった。篠ノ之箒、一夏と同じく俺の幼なじみでる。箒は俺と一夏が通っていた剣術道場の娘で、あの束さんの妹でもある。
どこか日本刀のような印象を持った娘だったが6年間さらに鋭さを増した気がする。
「廊下でいいか？」
箒がそう言って先に歩いて行った。俺としては今の状況から抜け出したいと思っていたから箒の言葉が神の助けに聞こえた。一夏もだいたい同じ気持ちだと思う。
「早くしろ」
「お、おう」
『今行くよ』
箒を先頭に一夏、俺の順で廊下を移動していく。
「そういえば、去年剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」
一夏がそうきりだした。そういえば確かに載っていたな。
『確か決勝戦で前年の優勝者から一本勝ちしたんだっけ』
「……」

箒は一夏と俺の言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた。
いや、正確には「一夏」の言葉にだが。
『ふふ…箒も昔と変わらないみたいだね～♪』
「な！？」
「…？」
俺がこう言うと箒は意味が分かったらしくさっきよりもさらに顔を赤らめた。
……一夏は、何のことかわかっていないようだが。
『ハァ…一夏のそういうところも昔と変わらないよね…』
「…？何言ってんだ拓也？」
『イヤなんでもないよ』
「そうか」
一夏の唐変木ぶりも変わってない、いやむしろ悪化しているきがする…
「な、なんでお前たちはそんな事を知っているんだ」
箒は、まだ少し頬が赤いままだが「なんでって、新聞で見たし……」
『ネットに載ってたよ』
「な、なんでそんなのを見ているんだ！！」
完全にテンパってるなコレ…
「あ、あと…」
「な、何だ！？」
「……」
何かもの凄い剣幕なのだが…
「あ、いや……」
箒自身も自分の剣幕に気づいたらしく、ばつが悪そうにしている。
まあ6年ぶりに一夏にあえたんだからそうなっちゃうのもわかるんだけどね～
「久しぶり。6年ぶりだけど、箒ってすぐにわかったぞ」
『確かにすぐにわかったね、髪型一緒だしね昔と。一夏もそうだろ？』

「ああ」
「よ、よくも覚えているものだな…」
「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」
「……」
あ～…一言余計なんだよなこの唐変木。箒メッサ睨んでるよ…
キーンコーンカーコン。
もう、時間みたいだな。
『時間だし戻ろっか』
「そうだな戻ろうぜ」
「わ、わかっている」
それから2時間目の授業が何とか終わり今は休み時間である。ちなみにであるが授業中に、一夏が参考書を読んでいない事が千冬さんにバレてまた叩かれていた。
「ちょっと、よろしくて？」
『「へ？」』
休み時間になりまたあの視線にさらされるのかと思っていたら、いきなり声をかけられて思わず素っ頓狂な声をだしてしまった…
『（たしかこの子は…）』
セシリア・オルコットーイギリス出身の代表候補生だったかな？
「ちょっと、聞いていますの？お返事は？」
おぉっと返事をするのを忘れていた…
『ゴメンね、ちょっと考えごとしてて』
「あ、ああ。訊いているけど……どういう用件だ？」
俺と一夏がそう答えると…
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度という物があるんではないかしら？」
「……」
一夏ほどではないが正直、この手合いは苦手だ。
ＩＳの戦闘力は従来の戦車や戦闘機などの戦力を軽く上まわって

いる。そのため、ＩＳ操縦者は偉いというのが常識となり女性＝偉いというのが定着してしまっている。
だからといって、コレはいただけない…コレではただの暴力以外のなにものでもない。
「悪いな。俺達、君が誰か知らないし」
いや、俺はオルコット嬢の事を知っているんだがな…てか、自己紹介を訊いていなかったのか？
ああ…千冬さんが担任だった事とかクラスメイトが全員女子とかで余裕がなかったのか。
でもオルコット嬢にはどうも今の反応はお気に召さなかったらしく、つり目を細めていかにも男を見下した口調で続ける。
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」
いや、俺は知っているんだけどね？でもやたらと候補生を強調するよね。でも候補生は、あくまで候補生であって代表ではないしオルコット嬢の他にも数人いるはず…そんなに強調するのって…ねぇ？
「あ、質問いいか？」
「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていた数名のクラスメイトがずっこけたのが見えた。
てか、一夏読んで字の如しだよね？わからない事を素直に聞くのはいいことだと思うけど、もう少し考えようよ…
「あ、あ、あ……」
「あ？」
あ、コレは耳をふさいでおこう。
「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

案の定すごい剣幕だよ…
「おう、知らん。拓也教えてくれ」　『ハァ…一夏少し考えようか？代表候補生って言うのは、昔の千冬さんのような国家代表ＩＳ操縦者の候補生の事だよ…読んで字の如しだよね？』
ほらオルコット嬢なんかぶつぶつと「信じられない。信じられませんわ…」ってずっと呟いてるし。
『まあ簡単に言っちゃうとエリートってことかな』
「そう！エリートなのですわ！」
おお、いきなり復活したよ。
「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」
選民思想の持ち主なのかな？いつからここは中世のヨーロッパになったんだろうか？「そうか。それはラッキーだ。」
一夏せめて棒読みをやめようか…
「……馬鹿にしてますの？」
何故だろう、このあとの展開が悪い方向にしか行かない気がする…
「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。そちらのかたのほうはちゃんと理解していらっしゃるのに。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じるかと思ってましたけど、期待はずれですわね」
「俺に何かを期待されても困るんだが、拓也がＩＳに詳しいのは昔からだし」
「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」
「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ…泣いてたのまれば教えて差し上げても欲ってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
唯一、をものすごい強調してたけど専用機もちで量産機に勝のは当たり前のことでしょうに…

ん？一夏が何か思案顔してるけどどうかしたのかな？
「入試って、あれか？ＩＳ動かして戦うってやつ？」
「それ以外に入試などありませんわ」
「あれ？俺も倒したぞ、教官」
「は……？」
ほぅ…一夏も教官を倒してたのか、正直驚いたな。
「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
「女子ではってオチじゃないのか？」
『なるほどね、女子ではオルコット嬢だけ、男子では一夏だけってことかな？』
「拓也はどうだったんだ？」
『うん？あ～…何か千冬さんが「お前の実力は聞いているから免除でいい」って言ったからやってないんだよな、それ』
あれ？何だろうクラス中が信じられないようなものを見る目でこちらを見ているのですが？
「免除とはどういうことですか！？そんな話し聞いたこともありませんわ！？」
オルコット嬢の言葉にクラス中がうなずいている。
『そ、そんなに驚くことかな？』
「あ、当たり前ですわ！！だいたいあの織斑先生がおみとめになー」
キーンコーンカーコン。
オルコット嬢の言葉を遮ったのは３時間目の開始のチャイムだった。
「っ……！またあとで来ますわ！！逃げないことね！！よくって！！」
そういって席に戻っていくオルコット嬢またあとで来るとか言っていたが正直遠慮したいところだが無理なんだろうな～…
３時間目は１、２時間目と違い山田先生ではなく千冬さんが担当らしい。何か大事な授業なのかな？
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないとな」
ふと、思い出したように千冬さんが言う。クラスの代表者とは、普通の学校でいうところの委員長のようなものらしい。
「自薦他薦は問わないぞ誰かいないのか？」
千冬さんがそう言うと…
「はい、織斑くんを推薦します！！」
「私は、東雲くんがいいと思います！！」
「お、俺！？」
ほらやっぱり…他薦なんていうからこんな事に…千冬さんを恨みがましく見ているとニヤリと返された。あの人確信犯だ！？
　まあとりあえず…
『一夏とりあえず落ち着こう。そして座ろう。』
「でも、拓也俺はやるなんて一言も…」
『他薦も問わないと言われた時点で俺達に逃げ道なんて無いよ…そうでしょ、織斑先生？』
「そのとおりだ東雲選ばれた以上は覚悟をしろわかったな織斑」
「い、いやでも…」
一夏はまだ納得がいかないらしい。俺？もう諦めたよ…千冬さんの目が本気だったからね…
「待ってください！納得がいきませんわ！」
その状態に異を唱える人が若干一命。オルコット嬢である。
「そのような選出認められません！大体、男がクラス代表なんていはじさらしですわ！」
やはりそうきましたか…プライドが高そう…いや絶対高いであろうオルコット嬢のことである。男である俺や一夏がクラスの代表者に選出されれば黙ってはいないだろうと思っていたが、予想道理になっちゃったな～…
　一夏もそろそろ我慢の限界みたいだし下手なもめ事を起こす前に手を打ちますかーー
『先生』

「なんだ、東雲」
「ちょっと、あなた！！わたしくしがまだはなーー」
『俺は、オルコット嬢を推薦します』
「ほぅ」
「……え？」
上から千冬さん、オルコット嬢の順である。
『他薦も問わないのでしょう？それなら俺はオルコット嬢を推薦させてもらいますよ。オルコット嬢も３人の中から改めて選ぶこの方法なら納得してもらえるかな？』
オルコット嬢は目を白黒している。聞いてるのかな？
『オルコット嬢聞こえてるかな？』
「え、ええ。聞こえていましてよ。そうですわね、それでしたら異論はありませんわ」
よし、後は選ぶ方法だなまあ無難に投票でいいかな、オルコット嬢には悪いけど投票だったら間違いなく俺か一夏が選ばれるだろう。俺は、理由があって代表にはなれないから自動的に一夏がクラス代表かな？一夏にＩＳの経験を多く積んでもらうためにもここは、頑張ってもらおう。
『オルコット嬢の了解も得られたし、後は選ぶ方法だけど無難に投票ーー』
「ちょっとよろしくて」
ーーでいいかな？と続ける事は出来なかった。今度はいったいどうしたのかなオルコット嬢？
「選ぶ方法でしたら私にいい考えがありましてよ」
ちっとも、いい予感がしてこないのですが…
「決闘ですわ！！」
「『な！？』」
一夏と揃って驚愕の言葉しかでてこなかった…
「決闘ってなんだよ！！たかがクラス代表を決めるのに決闘って！？」

一夏の言うとおりである。オルコット嬢君はいったい何を考えているんだい？
「あら、クラス代表はまとめ役の他にもトーナメントにも参加しなくてわいけませんわ。なら私達の中で一番実力のあるものがなるのが道理ではなくて？…それとも初めから勝自信がないのかしら？」
確かに言っている事は正しい。でも、なぜか挑発めいてるよなでもそんな見え透いた挑発にのるわけがーー
「いうぜ。その決闘受けて立つ！！」
いたーー！？
一夏何やってんだよ！！
『一夏ちょっとまーー』
「話はまとまったようだな。それでは勝負は1週間後の月曜日に1回目、3日空けた金曜日に2回目を行う。場所は第3アリーナ、時間は放課後だ。対戦順は1回目が織斑対オルコット、その勝者が2回目に東雲とだ」
「わかりましたわ」
「ああ、わかった」
『……もう好きにしてください』
なんで人が穏便にすまそうと思っているのにこうなるかな…
もうどうにでもなれだ。こうして初日の授業は進んでいくのだった。
～一夏サイド～
「うう……」
放課後、俺は机の上でぐったりうなだれていた。
　セシリアの決闘を受けたからにはっと張り切って授業を受けたのだが…
「い、意味分からん……。何でこんなにややこしいんだ…？」
早くも挫折しかかっていた…
「なあ拓也ＩＳのこと教えてくれよこのままじゃ何も出来ないままセシリアに負けそうだ」
隣の席の幼なじみであり、親友に助けを求めてみる。

『…勝手に挑発にのって決闘を受けて尚且つ人を巻き込んでおいて今度はなんなのかな？』
「い、いや拓也あれはつい頭にきてつい…」
普段温厚な拓也が目に見えて不機嫌である。てか怖い…顔が笑顔なのに目が笑っていないのだ。
「頼むよ拓也、やるからには絶対に勝ちたいんだ！！それに、これで負けたら千冬姉の顔に泥を塗ることになるかもしれない…もう守られるだけはいやなんだ」
そういって俺は拓也に頭を下げる。
〜拓也サイド〜
一夏が俺に向かって頭を下げている。『（まったく、昔と何も変わってないんだな本当に）』
つい笑みがこぼれてしまった。
一夏は昔から自分を守り育ててくれて千冬さんにとても感謝していた。それと同時に、いつか千冬さんを守れる存在いや、千冬さんだけではなく今まで自分や千冬さんを助けてくれた全てね人を守りたいと言っていた。
　そして、今一夏はその思いを形にする事が出来る力、守る力を手に入れたのだ。
『（ほんとに、お前ってやつは…）』
そんな事お願いされたら…
断るわけ無いだろう
俺はまた微笑みながらそんなことを考えていた。
〜一夏サイド〜
拓也からの反応が無い。やはりダメなのかと顔を上げるとそこには
「……」
思わず見とれてしまうような微笑みをした拓也の顔があった。その微笑みは女だって言われたら絶対に信じてしまうほどで、そこらの女優なんかめじゃないくらいに綺麗だった。
『……明日の放課後からだ』

「え？」
最初拓也が何を言っているのかわからなかった。
『明日の放課後から特訓だよ。一週間しかないんだビシビシいくから覚悟しろよ』
「お、教えてくれるのか！？」
『頼んできたのは一夏だろ？それに一夏の覚悟が伝わって来たしね。』
それに親友の頼みだしねっとまた微笑みながらいう拓也にまた思わず見とれてしまったのさ、一生の秘密だ。
『どうかしたのか？』
「い、いや何でもない。とりあえず明日からよろしくな拓也」
『任せなさいな一夏』
お互いの拳をぶつけ合いながら俺たちは笑いあった。
「ああ、織斑くん東雲くん。２人ともまだ教室にいたんですね。良かったです」
山田先生がそう言いながら書類を片手に教室に入ってきた。
『どうかしたんですか山田先生？』
「えっとですね、寮の部屋が決まりました」
そう言いって部屋番号のかかれた紙とキーを渡してくる。
「俺の部屋決まったんですね。一週間は自宅から通えって言われてたのに」
『事情が事情だならね安全面を考えたら妥当じゃないかな？』
「東雲くんの言うとおりですね。ということで部屋割りを無理矢理変更したんです」
「なるほどそう言うことか。でも俺荷物何も持ってきてないんだけどどうしよう？」
「私が手配しておいでやった。ありだたく思え。」
「あ、ありがとうございます…それじゃあ行こうぜ拓也」
『行くってどこえだ一夏？』
「どこって部屋だよ男って俺ら２人だけだし一緒の部屋だろ？」あ

あそう言えば一夏に言ってなかったっけ…
『一夏悪いけど俺は学生寮には住まないんだよ…』
「……は？」
一夏が何言ってんのお前みたいな顔でこっちを見てくる。まあ、言いたいことはわかるけどね…
「その辺のことは私が説明してやる」
ここで話しに入ってきたのは千冬さんだった。
「拓也にはな、学生の他にも技術スタッフとしてもうちの学園に来てもらっているの。そのため拓也には、教員寮の方に特別に部屋を用意したんだ。ちなみに拓也からの希望でだ」
ギギギーとロボットのような動きで一夏がこっちを見てくる。
「ど、どういうことだ拓也？」
『いや流石に女子寮に住むのは気が引けたからな～』
「俺はどうなるんだよ！！」
『がんば♪』
「拓也の裏切り者ー！？」
一夏が泣き崩れているがこればっかしはどうしようもないと言うか譲れない。ただでさえ女子は、あまり得意じゃ無いっていうのに寮生活とか無理だからね絶対精神的に。
こうして俺の学園生活１日目は終わりを迎えたのであった。

第2話（後書き）

何だか時間が全然進んでない！？どうしたらいいんだ！？

感想待ってます。

第3話

初投稿です！何だかんだで騒がしかった昨日と違い平和な今日この頃です。
　だったら良かったのにと思いながら昨日同じく女子の視線に耐えてなんとか今昼休みを迎えることができた。
「拓也～…俺もうダメだ…」
隣りで一夏が机に突っ伏している。
『昨日のあのいきはどこにいったのやら…それよりも、お昼ご飯食べに行くか』
「そうだな昼飯を食べて元気をだそう！！それじゃあ行くか！！」
一夏が簡単に復活した。お腹が空いてただけなのかな？
　それよりも、アイツを誘って早く行こうかね～
　ちなみに、この学園の食堂は物凄く美味しいことが昨日のお昼ご飯と夕飯で証明された。あのブリの照り焼きは絶品だったね！！うん。
『一夏どうせ食べるなら箒も誘って行こうよ』
「そうだな折角だし昔みたく3人でくうか！！」
『よし、そうと決まれば一夏箒を呼びに行くか』
「ああ！！」
一夏が少しでも箒の気持ちに気づくといいんだけど…
「おーい、箒！！昼飯食べに行こうぜ！！」
「な、なんだ一夏！！わ、私はべつにいい…」
　ああもう…箒は昔から素直じゃ無いところがあったからなぁ…
『そんな事言わないでさ箒も一緒に食べに行こうよ。一夏も箒が一緒のほうが嬉しいだろ？』
「ああそうだな。俺も箒が一緒だと嬉しいな。」
多分、料理はみんなで食べた方が美味しいからとかの理由で言ってるんだろうな～…ハァ…

「そ、そうか！！私が一緒だと嬉しいのか！！そうか、そうかよし！！早く食べに行くぞ」
まあ、これはこれでいいのかな～
『席はここでいいかな？ちょうど3つ開いてるし。』
「そうだなここでいいだろ」
「ああ、私もかまわないぞ」
さてと、席も決まったしいただきますかね。箒に言いたいこともあることだし。「「『ご馳走様でした』」」
みんな食べ終わったみたいだしそろそろいいから。
『一夏、今日からの特訓の事だけと放課後に箒と一緒に第3ハンガーに来てくれ』
「…一夏特訓とはどういうことだ？」
「ああ、俺ＩＳの事全然知らないだろうだから拓也に教えてくれるわように頼んだんだ」
『そういうことで、教える事になったんだけど、箒にも参加してほしいんだ。教える側として。』
「「え？」」
一夏も箒もどちらも驚いている。
『詳しい説明はは、放課後にするから2人ともとりあえず第3ハンガーに集合ね。一夏ちょっと箒に話があるから先に戻っててくれる？』
「あ、ああ。わかった。」
一夏はそういうと俺が何故急に箒を誘ったのかわからないといった感じで食堂を出て行った。
　なんか、物凄い視線を背後から感じるんだけどな～…
「どういう事だ拓也？」
箒がいつもよりも目を2割増しでするどくしている…
『一夏の特訓に箒が必要だからだよ？』
「だから、何故私の力が必要なのだ！！だいたい何故私が手伝わなくてはならないのだ…」

まったく…素直じゃないんだから…
『放課後も一夏と「一緒」にいられるよ？』
ッピク！！
「一緒に…だと？」
箒が身を乗り出して聞いてきた。あと、もう一押しかな。
『そうだよ。せっかく６年ぶりにあったのにあんまり喋って無いだろう？いい機会だと思うんだけどなぁ？』
「そ、そうか。そうだな。うむ、一夏とは同門でもあからなよし参加するとしよう！！」
あくまで、同門だからとかを理由にするのは箒らしいなぁ。
『ありがとね箒。あの唐変木は簡単にはこちらの気持ちに気づいてくれないだろうけど、頑張ってね♪』
「な！？べ、べつに私はやましい気持ちがあっていったのではーー」
『はい、はい。そういう事にしておきますよ～♪』
「た、拓也～！？」
箒が顔を真っ赤にしながら叫んでいる。まったく世話のかかる幼なじみだよ…
今日の授業が終わり今、俺と一夏、箒、千冬さんの４人は第３ハンガーにいる。　ちなみに千冬さんがいるのは白式のフォーマットとフィッティングを見届けるためらしい。何だかんだ言って一夏の事を大切に思ってるんだなやっぱり。
「これが俺のＩＳなのか…」
『そう、これが一夏の専用機ＳＭＳ社製ＶＦ０２－白式だよ』
一夏の目の前には、純白の騎士の鎧に似たＩＳ白式が待機していた。
「それでは、さっさとフォーマットとフィッティングを終わらせるぞ。一夏白式に背中を預けるようにして乗り込め。」千冬さんに言われたとおりに白式に乗り込む一夏。
『体調に違和感は無い？初めてハイパーセンサーを使った人は体調不良を起こす時があるから』「いや大丈夫みたいだ。拓也、千冬姉行けるよ」

どうやら大丈夫みたいだな
「３０分ほどでフォーマットもフィッティングも完了する。一夏アリーナに出て好きに動いていろ」
「わかった」
さてと明日からの訓練メニューでも考えようかな。
「…拓也」
『うん？』
そこには箒が浮かない顔でたっていた。
『どうしの箒浮かない顔して？』
「いや、私は一夏のために何をすればいいんだ？」
ああそう言えばまだ説明してなかったな…
『ゴメン。まだ説明してなかったな。とりあえずアリーナに行くよ。』
「いや、だから私はなにーー」
『来ればわかるよ』
そう言って俺は箒を連れてアリーナの観客席に向かった。
『（時間的にはそろそろかな？）』
〜一夏サイド〜
今俺はアリーナでフォーマットにフィッティング？だったか？を終わらせるためにアリーナをぶらぶらと動いて時間をつぶしていた。
「ふう、そろそろ３０分たつかな…」
そのときだった。いきなり電子音で頭に直接話しかけるようにして、フォーマットとフィッティングが完了したことが伝えられ目の前に確認のアイコンが出てきた。
「（押せばいいのか？）」
とりあえずアイコンを押してみると、白式全体が光に包まれ白式の機械的だった角張ったラインがなめらかな形えと変わっていった。
「これが白式の本当の姿」
「その通りだ」
俺の言葉に返してきたのは日本製のＩＳ打鉄のカスタム機を身につ

けた千冬姉だった。
「一夏それで白式わ完全にお前の専用機になった。大事にしろよ？」
千冬姉が何か言っているがそれどころではない。俺の背中を嫌な汗がが伝うのがわかる…
「ち、千冬姉なんでＩＳなんかを身につけてるんだ？」「うん？それはお前にＩＳの訓練をつけるために決まっているだろう」
打鉄の装備である太刀を構えながらそう言ってくる千冬姉。「い、いや…今日は遠慮したいなぁ～と…」
「拒否権はなしだ…それでは、行くぞ！！」
やっぱり拒否権はないんですね…って現実逃避してるばわいじゃない！？
「武装わ！？とりあえず武器を出さないと！？」
目の前に武器の一覧表がでてくる
「はぁ？」
思わずそんな声が出てしまった。
「なんで武器が一つしかないんだよ！！」
そう、武器が一つしかないのである。いくら確かめてもそれは変わらない。
「もう、無いよりはましだ！！」
半ばヤケクソな気持ちで近接ブレードを展開する。
「！？…これって雪片？」
白式の手には俺がよく知る刀が握られていた。
武器の名には雪片弐型（ゆきひらにのかた）と書かれている。
「千冬姉これって…」
「そうだ、それはかつて私が使っていた雪片と同じものだ」
「やっぱり」
「お前に雪片の特殊能力について説明しておくか」
千冬姉はそう言って太刀を下ろした。
「雪片の…特殊能力？」
「そうだ、一夏ＩＳの戦いがどうやって勝敗を決しているか知って

いるか？」
「ああ、ＩＳに攻撃してシールドバリアーをゼロにすればいいんだろ」
「そのとおりだ。雪片はそのバリアーを無効かして絶対防御を発生させる、バリアー無効化攻撃を行うことが出来る。絶対防御を発動させるとシールドエネルギーを大幅に使用する。つまりうまく使えば一撃必殺になりえると言うことだ。」
「バリアー無効化攻撃…そんなに凄いことができたのか」
「しかし、いい点ばかりではない。このバリアー無効化攻撃は自分のシールドエネルギーを使って発動させる、つまり使えば使うほど自分のシールドエネルギーが減っていくと言うことだ。」
「な！？それじゃあ諸刃の剣じゃないか！！」
「ああ、あとこの雪片は拡張領域（バススロット）の殆どを使っているから後づけで武装をつける事は難しいだろうな」
「それじゃあ俺の武器は雪片だけ？」
「そうだ、大体お前のような素人が射撃戦闘などできるものか。反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止、特殊無反動旋回、それ以外にも弾丸の特性、大気の状態、相手武装による相互干渉を含めた思考戦闘…他にもあるぞ。できるのか？お前に」
「……ごめんなさい」
自分の非を認めて謝る。
「一つのことを極める方が、お前には向いているさ。なんせーー私の弟だ」それから千冬姉と模擬戦形式の訓練をしながら近接戦闘と急速停止といった基礎移動技能の手ほどきをうけた。
「（千冬姉がせっかく教えてくれるんだ、情けない姿はみせられないよな！！）」
それから日が暮れるまで訓練を続けた。
～拓也サイド～
『もう始めてるみたいだな』
箒を連れてアリーナの観客席に来ると一夏と千冬さんが戦っていた。

「拓也説明してくれ。なんで一夏が戦っている？それから私に何を手伝えと言うんだ！！」
『箒には一夏に剣術の稽古をつけてほしいんだ』
「剣術の稽古？」
『そう。一夏のＩＳにはあの刀、雪片しか武装がないんだよ。今は千冬さんが基礎移動技能を教えているけど、あくまで基礎的なこと剣術において大切な間合いの取り方とかは経験を積んで体で覚えるしかない。これは箒が一番良くわかってるよね？』
「刀による間合いの取り方を一夏に教えるっか。確かに私に教えられることだな！！」
箒は一夏の力になれるのがよほど嬉しいのか何度も頷いている。
『ＩＳを使わないで普通に竹刀とかでも教えられるから、朝にでも
「２人きりで」練習したら？』
２人きりの部分を強調して箒に言う。
「ふ、２人きり」
箒は一瞬で顔を赤らめた。
『ふふ…箒顔が真っ赤だよ～♪』
「～～！？拓也からかうな！？」
『なんの話しかな～♪』
俺と箒はそんなやりとりをしながら一夏の訓練が終わるのをまつのだった。

あれから1週間箒が一夏に剣術を教え（たまに箒も打鉄を使って）、俺がＩＳの基礎知識や回避運動を教えた。といっても時間がなかったので回避運動に至っては初歩的なことしか教えられなかったが…今俺は箒、千冬さん山田先生とピットのリアルタイムモニターでアリーナで向かいあうように浮いている一夏の白式とオルコット嬢のブルー・ティアーズを見ている。
「…一夏」

隣の箒から心配そうな声が聞こえてきた。ＩＳには絶対防御があるためめったなことがないかぎり怪我を負うことはないと言ってもやはり心配なのだろう。
『大丈夫だよ箒。この１週間で一夏のＩＳの技量は各段に上がってる。少なくてもオルコット嬢の一方的な展開にはならないはずだよ。だから信じて待つとしようよ一夏が勝って帰ってくるのをさ』
俺はそう放棄に話しかける。
「…そうだな。私達が信じてやらねばな！！」
『始まるみたいだな…』
こうして一夏とオルコット嬢の戦いが始まった。
「拓也この勝負どうなると思う？」　千冬さんがモニターから目を離さずに聞いてきた。
『……五分五分といったところですかね。いくらこの１週間で一夏の技量が上がったと言っても、代表候補生であるオルコット嬢には遠くおよびませんからね』
俺はそこでいったん言葉をきる
『でも、今のオルコット嬢は油断を通り過ぎて慢心している。代表候補生であるある私が男なんかに負けるわけないって。その油断をつければ一夏にも勝機があるはずですよ。なんたって世界一の弟思いの姉が用意した最高の武器があるんですから。』
最後の言葉を千冬さんを見ながら言うと…
「……」
ギリリリリっ。ヘッドロックが炸裂した！！
『ち、千冬さん！！ギブ、ギブです。』
「拓也…私はからかわれるのが嫌いだ」
『いや、本心を言ったんでーーわかりましたスイマセン！！だからその手に持ったスパナをおいてください！！』
「わかればいい」
別に弟思いなことはいいことだと思うんだけどなぁ？

こんな会話をしているうちに勝負は華僑に入っていた。一夏のシールドエネルギーは残りわずか対するオルコット嬢は一夏よりはシールドエネルギーが残っているものの一夏の反撃で全てのブルー・ティアーズを破壊されていた。

『一夏がここから逆転するには雪片を当てるしかない…』

「ああ、しかし今の白式のエネルギー残量では一撃できるかどいかといったところだな」

一夏が勝には雪片のシールドバリアー無効化攻撃を当てるしかないしかもチャンスは一度きり、当てれば勝ち。はずせば負けである。

『次の一撃できまる』

俺がそう呟いた瞬間２人が動いた。一夏は雪片を構え突撃し、オルコット嬢は自分の身長よりも大きなレーザーライフルスターライトＭＫ？で一夏を迎え撃つーーーーー次の瞬間勝負がついたーー

勝者は一夏だった

第3話（後書き）

次回はやっとまともな戦闘シインを書けるかな？

第４話（前書き）

すいません、戦闘シーン書けませんでした…

第４話

一夏とオルコット嬢の試合が終わってから早２日がたった。クラスの全員がオルコット嬢が勝だろうと思っていたようであの試合の後は大変だった…

「一夏くんて強いんだね！！ＩＳのこと教えて！！」や「勝てないとか言ってゴメンナサイ！！」だなどと言ってくる女子が殺到し、収拾のつかないことになった。まあ一夏も気にしていなかったようだから謝ってきた女子に「別に気にしてないから大丈夫だよ」などと返していたら女子の中で一夏の株が急上昇してしまい、完全に一夏に惚れたなこれ…という女子が瞬く間に増えてしまった…

まあ、いつものごとく一夏はまったく気がついていないのだが…

ああ、見るからに箒が不機嫌である。どのくらい不機嫌かと言うと冗談抜きで箒の周りに黒いオーラが見えるくらい不機嫌である。周りの女子が本気で引いてるよ箒……

「なあ、拓也なんで箒はあんなに不機嫌なんだ？」

この！！唐変木！！普通気づくでしょ！？

『一夏いい加減にしないとほんとに背中から刺されるよ…』

「何で！？俺人に恨まれるようなことしたか！？」

ええ、していますとも…

『ハァ…』

もう考えても仕方ないと思い思考を切り替えることにした。一夏が隣でなんか叫んでいるが無視。

『（それよりも、オルコット嬢の落ち込みようはちょっとマズいかな…）』

そう、オルコット嬢はあの試合で一夏に負けていらい今までの態度が嘘のように静かになり、はたから見ていても落ち込んでいる様子がわかる。

『（それに何故かこっちをチラチラと見ているんだよなぁ。目が合

うとすぐにそらされるけど…）』
負けたぐらいで潰れてしまうんならそれまでだけど…
『（潰れてしまうには惜しいし、クラスメートが苦しんでいるのに見てみぬふりってのはね…）』
『一夏悪い今日の放課後の訓練俺抜きでやってくれる？』
「…？べつにいいけどなんかあるのか？」
『……やぼようだよ』

キーンコーンカーコン。
今日の授業最後のチャイムがなって放課後になった。
『さてと、オルコット嬢はどこかな？』オルコット嬢を探しているとちょうどクラスを出て行くところであった。
オルコット嬢を追って廊下にでて再びオルコット嬢をさがす。
『（寮に帰るわけじゃなさそうだね…）』
少し気になったので声をかけずに暫くついて行くことにした。いちおう言っておくが断じてストーカーではないからね！！
オルコット嬢を追ってついた先は…
『（屋上か…）』
他に人もいないみたいだし　話すには好都合だなと思い話しかけることにした。
『（少しでも力になってあげられるかな？）』

～ｓｅｓｉｒｉａ　ｓｉｄｅ～
「ハァ…」
あの日から何度ついたかはもうわからない溜め息をつきながら私は屋上のベンチに１人座っていた。今は誰とも話す気になれなかったし、１人になりたかった。
「（この様な姿私らしくありませんのに…）」

いつもの優雅な気品ある姿は確かにそこにはなかった…
「（この気持ちは一体何なんでしょう）」
セシリアはあの試合の日いらい自分でも理解不能な気持ちに悩んでいた…
　確かに勝負に負けたのは悔しい…
３年前に両親が事故で他界していらい親が残した莫大な財産を金の亡者達から守るために必死に努力し、たまたま受けたＩＳの適性検査で高いランクであったことから国が国籍保持のために様々な好条件を出され親の財産を守るためにも役に立つと即決した。それからも必死に努力を続けてきたのだ、そう簡単には負けない自信もあった。でもその自信は呆気なく砕かれた…
「（織斑…一夏…）」
私を倒した男。
誰にも媚びへつらうことのない強い瞳を持った男。
その言葉を口にしたわけでもないのに胸が熱くなるのがわかる。
本当はもうこの感情が何なのかわかっていた…でも認めたくなかった。認めてしまえば彼が私に振り向いてなどくれないという現実を同時に受け入れてしまうことになるから…
「（あんなに酷いことを言ってしまったのに…許してなどもらえるわくがない…）」
考えていて目の端に涙がたまっていくのがわかる…
「…っ…ぐす。ごめんなさい…一夏さん…」
届くはずもないのにそんな言葉が自然と口からでてきた。
『なら、謝りにいこうよ一緒にさ』
かえってくるはずのない言葉に返事がかえってきた。驚いて顔を上げるとそこには謝りたかったもうひとりの男が立っていた。
「し、東雲さん…」
～ｔａｋｕｙａ　ｓｉｄｅ～
屋上に上がってきたオルコット嬢を入り口の影からのぞいている。

オルコット嬢はベンチに座ってからずっと顔を伏せたまま何かを考えているようだった…
『（いざ来てみたけどどうしようかな？）』
正直どうしたらいいか途方にくれていたりする…
『（とりあえず、話しかけてみるしかないかな）』
そう決意を決めてオルコット嬢に向かって歩き出す。オルコット嬢はよほど考えに没頭しているのか俺が近ずいている事に気づいてないらさい。その時だった…
「…っ…ぐす。ごめんなさい…一夏さん…」
オルコット嬢の今にも消えてしまいそうで、でもしっかりと伝わってくる言葉があった。
『（なんだ…簡単に解決できるじゃないか）』
今目の前にいるのは代表候補生でも専用機持ちのエリートでもなく、ただのセシリア・オルコットという15歳の「普通の」女の子だ。
そして、たぶん一夏のことを……
『（だったらやるべき事は1つだけだよね！！）』
『なら、謝りにいこうよ一緒にさ』
「し、東雲さん…」『謝りにいこうよ』
「い、いつからいましたの！！」
『うーん…オルコット嬢が屋上にきたあたりからかな？』
「最初からではないですか！！」
『とりあえずさ、落ち着こう。ね？』
俺はオルコット嬢の隣に座りハンカチを渡す。
『とりあえず涙をふこう。せっかくの美人がもったいないよ？』
今まで言ったことも無いようなキザったらしい言葉で凄い恥ずかしいけど、ここは我慢！！
「あ、ありがとうですわ…」

『落ち着いたみたいだね』

「ええ。何とか…」
オルコット嬢も落ち着いたらしいので、本題にはいろうかな。
『オルコット嬢』
「…なにかしら」
『一夏がオルコット嬢が言った事を根に持って、自分のことを嫌ってるとか思ってないかな？』
「っ！？」
オルコット嬢が息を飲んだのがわかる。
『その反応だと当たりと思っていいかな？』
「…そのとおりですわ。あんなことを言ったのですから普通はわたくしのことを嫌いますわよね？」
自嘲気味に言ってくるオルコット嬢。その目にはまた涙がたまっていた。
思い込みが激しすぎだよ…
『……気にしてないよ』
「え？」
『だから俺も一夏も気にしてないし、一夏はオルコット嬢を嫌ってなんかいないよ？』

～ｓｅｓｉｒｉａ　ｓｉｄｅ～
この方は何を言っているの？一夏さんがわたくしを嫌っていない？あの様に罵詈雑言を浴びせて見下した態度をとったわたくしを？
「……ウソですわ」
『嘘なんかじゃないよ』
「ウソ！？ウソですわそんーー」
私の言葉は最後まで続かなかった。
『落ち着け』
東雲さんが頭に拳を落としてきたからだ。と言っても触れるようなもので痛みは、全く感じなかったが。

『まったくもう…思い込みが激しすぎだよ？いい、一夏はホントに一夏はオルコット嬢を嫌っていない。今日だって俺にセシリアにもＩＳの操縦習いたいってボヤいてたんだから』
「ほ、ホントですの？」思わず声が裏がえってしまった。
もう私のことを嫌いになってしまったと思っていた大切な人が自分を嫌っていない。その事実がわかってだけで胸の奥から喜びがわきだしてくる。
『幼なじみの俺が保証しますよ。』
「っ…う…ぐす…」
思わず涙がでてくる。
『だからオルコット嬢一夏に謝って、新しく始めようよ。』
「……はい！！」

～ｔａｋｕｙａ　ｓｉｄｅ～
良かった。後は謝りに行くだけだけど一夏まだアリーナにいるかな？
『じゃあオルコット嬢一夏はアリーナにいると思うから行こうか』
「セシリア」
『え？』
「セシリアでよろしくてよ？わたくしも拓也とよんでいいかしら？」
『もちろん。改めてよろしくてよセシリア』
「こちらこそ、拓也」
スカートを軽く摘んでお辞儀してくるセシリアなんか凄い似合ってるな～
「拓也一つききたいことがあるのだけどよくって？」
『…？何かな？』
「た、拓也はどうしてわたくしのことを気にかけてくれたのですか？わたくしは拓也にも酷いことを言いましたのよ…」
ああ、そのことね…うーん何て答えるべきかな？
『一夏と同じでその辺は気にしてないし、あんな暗い顔してたらほ

っとけないよ』
セシリアはキョトンとしている
『な、何か変だったかな？』
「ふふっははは！！拓也は凄いお人好しですわね♪」
『わ、笑うこと無いんじゃないかな！？』
「ふふ…でも本当にありがとう拓也」
何か凄いからかわれた気分だな…
あ、１つ聞き忘れてた。
『セシリア』
「なんですの？」
『セシリアってさぁ…もしかして一夏に惚れた？』
「なぁ！？」
おお、顔が一瞬で真っ赤だよ…これはきまりだね…
『惚れちゃったみたいだね』
「そ、それは…」
凄いどもってるなセシリア。
『セシリア一夏の幼なじみとして言っておくね。一夏は超がつくような唐変木でよっぽどじゃないと他人の好意に気づかない。そんでもって周りの女の子にフラグをたてまくるという感じなやつだから覚悟しておいてね。』
「やっぱりそうでしたのね…」
ゴメン、セシリア俺が変わりに謝っても意味ないけど謝らせてください…
「でも、必ずわたくしの魅力で落として見せますわ♪」
右手で銃を作りアリーナな向かって打つまねをしながら言ったその姿は…ちょっと見とれてしまうくらいに綺麗な笑顔をうかべていた。

『お、いたいた』
セシリアと一緒に一夏が訓練わしているアリーナまで来るとちょうど一夏が箒と出て来た。

『セシリア、大丈夫？』
「ええ、大丈夫ですわ」
『おーい、一夏、箒！！』
一夏と箒はこちらに気づいたらしく近づいて来る。
「拓也用事はすんだのか？てか、なんでセシリアと一緒なんだ？」
『用事はまあだいたいすんだよ。セシリアとは、一夏に言いたいことがあるって言うから連れてきたんだよ』
俺はそう言って後ろに控えていたセシリアを一夏の方におしだした。
「あ、あの一夏さん…」
「なんだよセシリア？」
「その、…このあいだは酷いことを言ってゴメンナサイ！！」
セシリアはそう言って頭をさげた。
謝られたとうの一夏は、状況についていけないらしくポカンとしていたが、納得がいったらしく「べつに気にしてないぞ？だから頭を上げてくれよセシリア」
笑顔でそう言った。
「これからよろしくな、セシリア」
「はい！！」
『話も終わったみたいだしみんなで夕飯でも食べに行く？』
「ああ、行くか」
「ご一緒しますわ♪」
「……ああ」
上から一夏、セシリア、箒の順である。
『（箒はやっぱり気づいたみたいだね～…）』
箒はセシリアの一夏に対する気持ちに気づいたらしい。恋する乙女の直感は、ハイパーセンサーよりも強力だ。

あれから、一夏の訓練をセシリアも手伝ってくれるようになった。
『（箒を説得するのが大変だったけど…）』

危うく打鉄とブルー・ティアーズでガチバトルになりかけたときは本気で焦った…
　そんな感じで今日の一夏との対戦の日をむかえたのである。俺は今一夏とは反対側のハンガーで1人ＩＳのを展開して試合開始を待っている。ちなみに、箒とセシリアには一夏のほうに行っている。
『そろそろかな』
俺は一夏がアリーナに出たのをハイパーセンサーで確認しカタパルトに接続する。
「東雲くん、試合開始時間です。発進タイミングをそちらに渡します。」
通信から山田先生の声が聞こえてきた。
『了解。さてとメサイヤ飛ぼうか。』
そう言って俺はカタパルトから飛び立った。

～ｉｔｉｋａ　ｓｉｄｅ～
「なあ箒、セシリア」
「なんだ、一夏？」
「どうかしましたか、一夏さん？」
俺は今、箒とセシリアと試合開始を待っている。この前からセシリアが訓練に参加するようになり、色々と教えてもらっている。やはり、代表候補生だけあってセシリアは優秀である。
「拓也のＩＳってどんなのなんだろうな？」
「そう言えば一度も見たことがないな。」
「わたくしも、知りませんわね…」
拓也は訓練では学園のＩＳを使っていたので俺は一度も拓也のＩＳを見たことがない…
「前にどうして自分のＩＳを使わないのかって聞いたときに『俺のは近接戦闘ようの武装がないから、一夏に教えずらいんだよ』って言われたからやっぱりセシリアと同じタイプの射撃型かなと思っ

たんだけど」
「近接戦闘ようの武装がない？そんなＩＳ聞いたことありませんわね」
セシリアの言うとおりである。普通は射撃型だとしても最低限の近接戦闘ようの武装を持っている。出なければ接近されたらおしまいである。
「だったら、近接戦闘にもちこめれば一夏のほうが優位だな」
「ですわね。と言っても、一夏さんの白式には近接戦闘ようの武装しかありませんけど」
「まあ、頑張ってみるさ！！」
そんな話しをしていると通信から山田先生の声が聞こえてきた。もう試合開始の時間らしい。
「それじゃあ、行ってくる」
「ああ、頑張れよ一夏」
「私が教えてさしあげたのですから大丈夫ですわ」
俺は箒とセシリアの言葉を聞きながらアリーナに向かった。
アリーナにでるとハイパーセンサーが拓也のＩＳの状況を教えてきた。
「（ＶＦ－０１メサイヤ、これが拓也のＩＳの名前か…）」
ＶＦ－０１ってことは白式と同じでＳＭＳ社製なのかなどを考えていると、どうやら拓也も出てきたらしい…
「え？」
でも、拓也のＩＳが出てくるはずのカタパルトから出てきたのは……一機の戦闘機だった…

～ｔａｋｕｙａ　ｓｉｄｅ～
俺がアリーナにでると、目の前の一夏からだけでなくアリーナの観客席からも驚愕や困惑が感じ取れた。
『（まあしかたないかな、今はどう見ても戦闘機だしね…）』

俺は、一夏とある程度距離をとるとメサイヤをファイターからバトロイドに変える。
『一夏、待たせたかな？』
「お、おい！！拓也今のなんだよ！！なんで戦闘機がいきなり変形してんだよ！！」
『あ～…やっぱり驚くか。俺のメサイヤは普通のＩＳとは違って形態を３つに変えられるんだよ』
「形態を変える？」『そう、メサイヤは戦闘の状況にあわせて状態をかえるんだよ。ちなみに今の状態が基本のバトロイド、さっきの戦闘機状態がファイター、あとまだ見せてないけどガウォークってのがあるよ』
一夏はまだ驚いてるみたいだけどそろそろはじめないとね…
『一夏、そろそろはじめるよ』
一夏も俺の雰囲気が変わったのがわかったらしい。表情を引き締めて雪片を構えている。
『一夏、どれくらい強くなったか見せてもらうよ！！』
「あれだけ訓練したんだそう簡単にはやられないぞ！！」
その瞬間戦いの火蓋が切っておとされた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6350q/

IS〜インフィニットストラトス〜一撃必中

2011年2月11日08時02分発行